

ふれあい たまご

「ふれあいたまご」は多摩湖町福祉協力員会の広報紙です。
年2回(9月・3月)発行し、多摩湖町の全戸に配布しています。

第56号

令和3年(2021年)9月

発行：多摩湖町福祉協力員会
連絡：Tel.397-0737
(地区長 木崎朗子)

東村山市社会福祉協議会
東村山市野口町 1-25-15
(Tel.394-6333)

地区長になって

このたび多摩湖町福祉協力員会の地区長になりました^{きざきさえこ}木崎朗子です。どうぞよろしくお願ひいたします。日々コロナ感染拡大の報道が続いていて不安が募ります。一日も早いコロナ収束を願うばかりです。多摩湖町福祉協力員になり早いもので十年が経ちました。「無理をせず、できる範囲で活動に参加してください」という先輩の方々からの呼びかけにいつも励まされていたように思います。ちょうどこの十年、高齢の私の両親、夫の両親の様子伺い、通い介護で家を留守にすることが頻繁でした。薄れていく地元とのつながりを修復してくれたのが協力員の活動だったと思います。



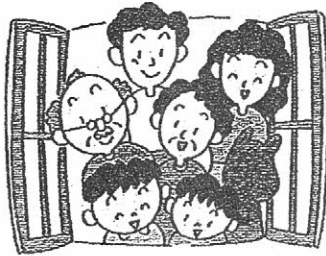
ご近所に長寿のお祝いの品をお届けに訪問する、あるいは集金に上がるなどほんのちょっとしたボランティアが始まりでした。これらのことから得るものは多々ありました。知り合いになり、近頃の様子を会話する。さらには道で会えば手を振って呼び止めてくださり、会話が弾むご近所仲間に。こちらが情報を伝えるというよりも、情報を頂いていると思うことは度々です。ボランティアをするということは人助けではなく自分の方こそ助けて頂いている、その思いを強くしています。ふれあいセンターでコンサート企画に参加した折、近所の方に次のように言われました。「近所に身軽に出かけて行って、あれだけ楽しめるなんて。貴重な時間を作ってくれて、ありがとう」。この声かけはとても私の心に残っています。

多摩湖町内で、多摩湖町に住む人たちと知り合い、つながりを深め、楽しみを共有する。これからも大事にしていかなければならない考えです。そして、この考えをもとに私共の活動を推し進めて行きたいと思います。コロナ禍にあり、今は対面でお会いすることは難しくなりましたが、協力員一同、皆様に寄り添えればとの気持ちでいっぱいです。不安、心配事、困り事、また人恋しくて話したいなどありましたら、お近くの協力員にお声がけを。いろいろな面で皆様に支えられての福祉協力員会活動です。ご協力をよろしくお願ひいたします。

令和3年度 長寿記念品のお届け

新型コロナウイルス感染拡大防止と長期化のため、多摩湖町では本年度も郵送でのお届けとなります。9月中旬に、対象の方に東村山市・東村山市社会福祉協議会よりお祝いの挨拶状と記念品を郵送いたします。

ボランティアの窓



多摩湖町でふれあいの輪を広げる

緑豊かなこの町に移り住んで、十年余りが経ちました。多摩湖の向こうに臨む富士山の雄大な姿や春の桜の花を始めとし、四季折々の自然の美しさに心をうたれました。

新しい土地での生活がスタートするときに、私の中に一つの思いがありました。それは「地域の方々とのふれあいを大切に、日々を送っていきたい」ということでした。地域の方々とのふれあえる何か・・・と思っていた時、目にしたのが社協ニュースの「ボランティア講座」のお知らせでした。何か心ひかれるものがあり、早速応募し、何回かの講座を受講しました。

そんな中で出会ったのが、福祉協力員さんや他のボランティア活動をされている方々でした。「一緒に活動してみませんか？」とのお誘いを受け、町のことなど全くわからない私が・・・との思いもありましたが、いろいろ地域のことを教えていただこうと思い、お仲間に入れていただきました。多くの方が、様々な形で、地域のことに関わっておられる様子を知り驚きました。



参加させていただくにつれ、出会いの輪も広がっていきました。中でも初めて長寿のお祝いの品をお届けに伺ったときにはとても緊張しましたが、はじめてお会いしたにも拘らず、温かく迎えてくださり労いの言葉をかけていただき、お届けに行った私のほうが喜びを感じました。

昨年からの新型コロナ感染拡大という思いもしなかった事態の中で、より人と人とのつながりの大切さを感じます。小さなことでもいい、自分にできることを一つ一つさせていただこうとの思いを強くする今日この頃です。

(D E)



私達福祉協力員は

- ・困っている人をひとりぼっちにしないまち
- ・様々な人が協力しあうまち
- ・誰もが地域活動に参加できるまち
を目指します。

多摩湖町を歩いてみる シリーズ⑭

村山上貯水池・村山下貯水池（通称 多摩湖）

— 湖底に沈んだ村の景観 —



狭山村内堀から東村山村回り田方面を望む

多摩湖は東大和市に位置し、面積は市全体の4分の1に当る。明治45年（1912年）に決まった村山貯水池建設の頃の村の景観である。狭山地域は多摩と入間に跨がる丘陵地で、山の形は六本の指の掌を伏せた様だった。陽のあたる南斜面は村人の住んでいる村山郷と北斜面を宮寺郷と呼んだ。山中に二つの渓谷があり、北側の谷を山口郷、南側の谷を宅部郷と呼んだ。多摩湖地域は南側の谷の部分にあたる。東西に延びた二つの丘陵の間に開けた「谷戸」の村落であった。丘陵の中央を西から東へ宅部川が流れ、さらにそこに流れ込む沢がいくつもの谷を作っていた。二つの丘陵は多くの舌状の台地に分かれていた。

- 台地 高いところは主として山林で、面積は216町3反7畝（約215ヘクタール）で主に松、杉、檜、榎、樺、椴、桐、山栗で炭焼窯が出土しており、炭焼を行っていた。
- 沢 沢の大部分は堤を築いて溜池としていた。東池、西薬寺池、堂ノ池、こさ池、おぶすな池ほか5池あった。
- 泥染 沢の水が流れこむ湿地や田に金気が浮いた所があった。そこで「あく染」とよばれる泥染が行なわれていた。この金気を含んだ沢の水で女の人が、お歯黒をつけたという。
- 宅部川 多摩湖底のほぼ中央を西から東へ流れるこの川は谷の最も低地にあり、川に沿って田が開けていた。川には堰をもうけ、田圃の灌漑用とした。蔵敷堰、奈良橋堰、内堀堰のほか狭山に一つ、宅部に一つの堰があった。
- 集落 最も人口の割合が高かったのは下流の上宅部で、移転時の戸数は次の通りである。上宅部42戸、中田5戸、林12戸、杉本8戸、内堀38戸、荒ヶ谷10戸、石川46戸、計161戸 その他下堰の下になった東村山分は23戸あった。
- 神社 住吉神社、御霊神社（大正12年狭山神社に合祀）、杉本神社（氷川神社から分社した）、氷川神社（大正8年熊野神社とともに合祀され清水神社となる）
- 寺 慶性院、蓮華寺、三光院（唯一下貯水池地域にあった寺で古い取水塔の近くにあった）
- 堂 阿弥陀堂、ガサ堂（西薬寺地蔵堂）、地蔵堂、中堂、塔頭堂
- 道 道の主なるものは宅部川の北側を東西に走る道で谷戸の人たちが東村山に抜けるメインストリートであった。所沢に行く道が南北に走っていて、所沢との交渉が深かった。そのほか奈良橋の八幡神社から内堀の堂の西を山口に抜ける道と杉本坂から西薬寺地蔵堂の東を北上する道が良く使われていた。
- 橋 宅部川に架かる橋は12ヶ所あった。下島橋、稲荷橋、中橋、堰の橋、一本橋（東村山に一番近い橋）など 大抵は板橋か土橋であった。



三光院下から蓮華寺及びその右方一帯を望む

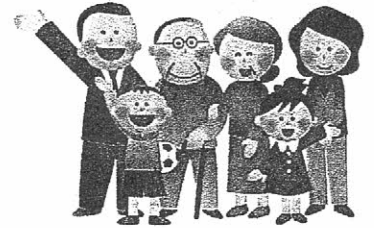
（大熊 鎮成）

民生委員・児童委員掲示板 その⑭

コロナ禍に携わって

コロナ禍での活動が1年半近くとなりました。訪問活動を自粛している今、高齢者の皆様とお会いし、お話しをする機会が殆どなくなりました。

高齢者の中には ・日中デイサービスに通われている方 ・ヘルパーが来訪される方 ・介護サービスを沢山利用しながらも老老介護の毎日を送られている方々など生活環境は様々です。



民生児童委員の大切な活動の一つに高齢者の見守りと安全確認があります。今は対面でお話しをすることが難しく、高齢者とのコミュニケーション能力が問われていますが、私なりに行なったことは、チラシやメモ用紙にメッセージを書いてポスティングをして対象者を回ることでした。何度か続けているうちに、「今は元気にしています。大丈夫です」と、お電話を戴くことが多くあり、声を聞き、お話しが出来ることが大変嬉しくとても安心します。私にとってこのようにコミュニケーションがとれることは活動していく上で、励みとなり、次の活動へと繋がっていくのだと思います。コロナ禍と向き合っている高齢者の皆様に少しでも安心と安全をお届けできたらと思う日々です。

なお、本年5月より全国市区町村で待ち望んでいたワクチンの接種が高齢者と基礎疾患のある方に始まり高齢者の陽性率が2%台となりました。12月迄には全人口の60%の接種を目論んでいます。これによりコロナ禍が1日も早く収束することを願っています。最後になりましたが1年半に及んで献身的に医療行為、診療に関わっている医療従事者・関係者に対し心から感謝と御礼の言葉を捧げたいと思います。

(清水 敦子)

あしがき

紅葉の鮮やかな彩りを添えた10月のある日の午後「境・多摩湖自転車歩行者道」を3段ギアの自転車で杉並方面に向かった。同歩行者道の起点を越えた武蔵境浄水場近くで、車道から歩道へ変更しようとした際、縁石を斜めに入った為、タイヤが縁石にとられて転倒してしまった。丁度西東京市にあるM大4年の女子大生2人が、クラブ活動の休憩で前方を歩いていて慌てて戻ってくれて「大丈夫ですか。大分出血しています。近くに病院がありますので行きましょう」と自転車を引いて、病院に案内してくれた。50分以上待ち診察が終わるまで見守り付き添ってくれた。極自然に当たり前の様に対応してくれた2人の女子大生にこの上ない喜びと有難とうの気持ちが隠しきれなかった。名前と学部を伺って、後日学長宛にお礼と手紙を2人に渡して欲しいとお願いした。知らない場所で即座に手を差し伸べ、優しい言葉をかけ、人の痛みを分かってくれた2人の女子大生。これが福祉の原点であることを心に刻んで家路に向かった。痛みを忘れた快い一日であった。

(大熊 鎮成)

デザイン：田島 徹